

モンゴル、苦楽とともに生きる伝統医療

長 岡 慶*

「私は2つの時代を経験した。ひとつは社会主義の時代、そしてもうひとつは資本主義の時代だ。」

モンゴル伝統医療の研究者ボルド博士（40歳代・男性）は言った。2013年、私はモンゴルの首都ウランバートルにいた。博士は私に、社会主義の時代に伝統医療の知識の多くが失われたということ、一方で、彼自身が伝統医療に関心をもったのもこの時代であったことを語った。18歳から3年間兵役についた彼は腎臓を傷め長く痛みに苦しんでいたが、あるとき在家僧に教えられた伝統薬で痛みから救われた。当時、伝統薬の販売は禁止されていたため、彼は自ら薬草を集めて薬を作った。博士と同じ大学で伝統医療を学んだというアルタンさん（30歳代・女性）は、伝統医療が解禁された後に大学へ入学し、伝統医の資格を得た。もともと彼女の祖父は村の伝統医であったが、伝統医療の弾圧下で父は後を継ぐことができなかった。アルタンさんが伝統医を志したのは父の勧めによるところが大きいという。

宗教の武器から文化の象徴へ

モンゴルにチベット医学が広まったのは、王がチベット仏教を国教とした16世紀末のことである。モンゴルの伝統医療（モンゴル医学）は、在来の医療知識の上にさらにチベット医学の理論を取り込み、確立された。しかし、1921年の民族革命でモンゴルは社会主義国家となり、旧ソ連の影響が強まると、1937年「チベット薬は宗教活動を強める『武器』である」として伝統医療の禁止が決定された。その翌年にはすべての伝統薬の商業販売が禁止され、伝統医療は公の場から姿を消した。

しかし、伝統医療は民衆の間では密に行なわれ続け、民主化の機運が高まる1990年代初頭に、モンゴル政府は「伝統医療開発基本方針」（1991年）を定め、続いて民主化後に「モンゴル伝統医療開発国家政策」（1999年）を制定した。これにより初めて伝統医療は公式に承認され、モンゴルの「知的文化遺産」として国家政策による伝統医療の保護・発展がめざされることになった。現在、モンゴルの伝統医療は復興の途上にあるといえる。国立・私立の伝統医学大学や伝統医学科

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

が次々に設立され、製薬工場で伝統薬の製造や品質の標準化が行なわれている。

2001 年モンゴル政府は日本財団に社会開発支援を要請し、「モンゴル伝統医療普及事業」の実施が決定された。2003 年「ワンセンブルウ・モンゴリア NGO」が日本財団の協力でウランバートルに設立され、多数のモンゴル人伝統医や研究者、製薬工場、政府関係者が関ることとなった。この事業は日本の置き薬の方式を採用し、9 種類から 21 種類の伝統薬（さらに体温計、消毒用アルコール、脱脂綿、包帯、バンドエイド）の入った薬箱を各家庭に配置し、半年ごとに使用済みの薬代だけを集金して、新しく薬を補充するという仕組みで運用されている。2010 年までにモンゴル全 21 県のうち 7 県、1 万 6,000 世帯に薬箱が配置され利用されている。

草原の村へ

私は、2013 年 8 月ヘンティ県のある村を訪れた。ウランバートルから車で 5 時間ほどかかるこの地域は、2006 年から伝統医療普及事業が実施されている。

「サンバノー」（こんにちは）

バガ・エムチのボロルトンガラル先生（30 歳代・女性）が笑顔で迎えてくれた。バガ・エムチとは 1940～50 年代に政府が地方の医師不足を補うために新たに資格を与えた准医師（直訳は村医者）のことで、手術以外の診療を行なうことが認められている。この地域には 6 人のバガ・エムチがおり、病院（近

代医学）の手伝いや、事業に参加する家々を訪問し健康チェックや伝統薬の補充、集金、事業本部が発行するニュースレターの配布を行なっている。集金したお金やその記録、補充用の薬や古くなって回収した薬などは、この地域に 1 軒ある伝統医療の診療所で管理され、事業本部との間でやりとりされる。ボロルトンガラル先生の案内のもと、私は病院や伝統医学の診療所のほか、村で暮らす 6 世帯の家庭を訪問した。

バヤサガランさん（51 歳・女性）とバトサイフンさん（60 歳・男性）の夫婦が暮らすゲルには手作りのチーズやヨーグルトが置いてあり、天井からは羊肉が吊り下がっていた。テレビや電話もある。三男一女の子どものうち、三男（26 歳）が同居し、1,200 頭以上いる家畜（ヒツジ、ヤギ、ウマ、ウシ）の放牧を手伝っている。彼らの薬箱をみせてもらおうと、ソジド（腎臓・泌尿器の不調）やマン 4 タン（風邪）、ノロウ 7 タン（風邪・滋養強壮）、シジェド 6（胃痛・消化不良・食中毒）、バル 10（関節痛）という伝統薬がよく使用されていた。たとえば、マン 4 タン



写真 1 プラスチック製の薬箱に入った伝統薬



写真2 ゲルの中央に置いてある薪ストーブはモンゴルのうどんツワンを作る際に小麦粉を練った生地を焼くためにも活用される



写真3 モンゴルの草原

は土木香（オオグルマの根）、苦参（クララの根）、接骨木（ニワトコの茎）、生姜を調合した粉薬で、ノロウ7タンはマン4タンにさらに訶子、毛訶子（ともにミロバランの果実）、梔子（クチナシの果実）を加えたものであり、シジェド6は大黄（ダイオウの根茎）、訶子、土木香、山奈（バンウコンの根茎）、岩塩、天然ソーダを調合した粉薬である。薬の原料となる生薬はモンゴル北部の森林地帯や南部の砂漠地帯から調達され、インドや中国からも輸入されている。春は家畜の出産で忙しく、冬は寒さが厳しいので、バト

サイフンさんはひじや肩などの関節が痛くなり、やや太り気味のバヤサガランさんはひざが痛くなり、とくに冬は毎日肉を食べるため、胃痛になることも多いという。こうした痛みや風邪、疲れ気味のときに治療や予防のため伝統薬が飲まれている。彼らは、伝統薬が家にあることで「わざわざ町まで出かけて薬を買いに行かなくてもいいようになった」と語った。経済的にも伝統薬は西洋薬に比べて安い。しかも使用時にすぐ払わなくてもよく、集金日までお金を用意する猶予があるので使いやすいという。

ほかの世帯では、胃痛や関節痛、風邪のほか、腎臓や肝臓、心臓の不調、婦人病などにも伝統薬が使用されていた。また、多くの家庭で、家畜に対しても伝統薬が使われており、たとえば産後すぐに排出されるはずの胎盤がなかなか出てこないとき（胎盤停滞）は婦人病薬が、家畜が元気のないときには滋養強壮薬がいずれも成人の2倍の量で用いられていた。

日常に息づく民間医療ドム

一方で、モンゴルの民間医療を「ドム」といい、古くから動物の肉や毛皮、反芻物や臓器を用いた多様な治療法が知られている。私の訪れた村でも身近にあるさまざまなものが薬として日常的に利用されていた。いくつか紹介しよう。

①馬乳酒

「夏にあまり胃痛にならないのは、なぜですか」という私の問いに、チョロンバートルさん（50歳・男性）は「夏には馬乳酒を毎



写真4 夏につくられる馬乳酒



写真5 バターさん夫婦とゲル

日飲んでいるからさ」と答えた。彼は馬乳酒をどんぶり鉢いっぱい注ぎ、私や同行していたバガ・エムチに渡した。私たちはそのどんぶりを両手で受けとり口に運んだ。馬乳酒はすっぱくてアルコールはさほど強くなかった。馬乳酒は体によい飲み物とされ、落馬して骨折したり筋を違えたりしたときには馬乳酒を飲んで骨や筋を柔らかくしてつなげるという治療法もある。

②タルバガ

あるとき、村の青年たちと野生のタルバガ（モンゴルマーモット：*Marmota sibirica*）の肉を食べた。タルバガは村の人々にとってご

ちそうで、首を切り落とし内臓を取り除いた後、腹に拳大ほどの黒い焼け石をぎっしりと詰めて蒸し焼きにされる。青年たちはそれをさばくと、腹から熱の冷めた石をすべて取り出し互いに分け合って、めいめい自分の手に念入りにすりこんだ。「こうすると体の中にたまった悪いものが外に出ていくんだよ。」湿ってべとべとした石には、肉の焦げがつき、こすると私たちの手は真っ黒に染まった。

③人間の母乳

バターさん（43歳・男性）は家畜の世話を終えてゲルに入ってくると、懷から小さな白い瓶を出して棚に置いた。

私：「これは何ですか。」

バターさん：「ん？知人の母乳だよ。」

私：「え、何に使うのですか。」

バターさん：「母乳は馬が風邪をひいたときに飲ませるとよく効く。それに俺たちも目が風邪になったときよく使う。すぐ治るよ。」

夏の日差しや冬の雪に反射した太陽の強い光で目が痛くなったとき、それは「目の風邪」（ヌッドウニーハニャット）といわれる。目が風邪をひくと、村の人々は知人から母乳を分けてもらい、それを目に垂らすのである。

④冷泉

村周辺には天然の冷泉がいくつか湧き、その水は胃腸が痛いときに飲むと効果があるとされていた。冷泉水をすくって飲んでみるとシュワッと舌の上ではじけた。それは炭酸水で、水面を覗き込むと小さな気泡がポコポ



写真6 母乳の入った小瓶



写真7 冷泉を汲む

コと出ていた。村の青年もやってきて、ペットボトル2本分の水を汲んでいく。冷泉の周りは木の柵で厳重に囲われ、まるで草原の中の聖域のようであった。

現代の苦楽とともに

モンゴルでは、近代医学以外のすべての医療を禁止するという時代が約半世紀もあった。しかし、その事実を感じさせないほど、村で目にした人々の生活は、多様な伝統医療

や民間医療ドムと関り合っていた。村だけではない。都市でも伝統医療の診療所に多くの人々がやってきていた。ウランバートルの寺院の中にある診療所では老人と伝統医が次のような話をしていた。

老人：「今は血圧を下げる薬（近代医薬）を飲んでます。それと子どもたちが腕の関節痛にいいと、いろいろな薬をもってきてくれるので飲んでます。チェコの薬や韓国の薬です。」

伝統医：「そんなにいろいろな薬を飲んではいけません。あなたは胆嚢がよくないので処方する伝統薬と元々飲んでいた血圧を下げる薬を飲み続けてください。でも、ほかの薬はいけません。大切な人があなたをどんなに心配して薬をもってきても、飲まないようにしてください。」

伝統医は私に、薬同士の相性を知ることの重要性を語った。

民主化後、モンゴルでは海外への出稼ぎ労働者が増加する一方で、中国や韓国からさまざまな企業が進出してきている。食習慣の変化や、海外からの医薬品・サプリメントの流入、高血圧症などの生活習慣病の増大といった現代の状況を通して伝統医療は単に過去の古き良き医療として留まらない。それは「生きた医療」として現代の苦楽とともに再構築され続けている。